學界展望

海域東南アジア史研究の回顧と展望

生田　滋

一

「東南アジア」は一口にいうと西では南アジアすなわちインド文明圏、北では東アジアすなわち中國文明圏にはさまれた地域である。ただしこの地域が「東南アジア」という、一つのまとまりを持った地域として認識されたのはきわめて新しく、一九六五年に Charles A. Fisher: *South-east Asia. A Social, Economic and Cultural Geography* (London, Metheun, 1965) が出版されてからのことであるといってよい。それ以前は東南アジアは西のほうから見て「インド以遠」Further India とか、ヴェトナムを除く地域を「インド化された諸國」Indianized States と呼ばれたり、東アジアのほうから見て「南洋」あるいは「南海」と呼ばれたりしていた。

よく東南アジアを「大陸部」と「群島部」あるいは「島嶼部」にわけることがある。たとえば最近刊行された「新版世界各國史」の東南アジア史も二分冊とされ、それぞれが大陸部、群島部に割り當てられている（石井米雄・櫻井由躬雄編『東南アジア史Ⅰ　大陸部』、池端雪浦編『東南アジア史Ⅱ　島嶼部』ともに山川出版社、一九九九）。こうした區分法は便宜的なものではあるが、それなりに便利なので、廣く使われている。一方「海域東南アジア」は Maritime Southeast Asia に對して與えられた譯語であって、大陸部對群島部あるいは島嶼部という二分法による分類とは異なった概念である。つまり「海域東南アジア」とは「海と關係のある東南アジア」、あるいは「海で結ばれた東南アジア」を指す概念である。したがってここでは「海域東南アジア」を大陸部および群島部を含む東南アジア地域のうち、分水嶺を境界線として、その海側の地域を指すということにして、議論を始めたい。なお時期的にはほぼスエズ運河の開通する一八六九年前後までをカヴァーすることとしたい。

このように考えると、先ほど述べた「インド以遠」とか「南洋」あるいは「南海」といった、「東南アジア」という概念が成立する以前の呼び方がにわかに意味を持ってくる。それはつまり「インド以遠」の地域がヨーロッパ人あるいはインド人のインド研究者によってインド人、アラブ人、ペルシャ人あるいはヨーロッパ人の海上活動の場として認識されていたということを意味しており、その歴史はインド文明、イスラム文明、そして西歐文明がインドの先、つまり「インド化した諸國」あるいは「大インド」にどのようにして傳播していったかの歴史として認識されていたからである。同樣に「南洋」あるいは「南海」は中國人あるいは日本人の研究者によって中國人あるいは日本人の海上活動の場として認識され、その歴史は中國人、あるいは日本人の東南ア

ジア地域への進出の歴史として認識されてきたのである。

こうした意味でまず十六世紀以前のヨーロッパ人のアジア進出に關する史料をまとめたものが Henry Yule: *Cathay and the Way Thither. Being a Collection of Mediaeval Notices of China.* New Edition revised throughout in the light of recent discoveries by Henri Cordier (London, Hakluyt Society, 1913-16. 4 vols) である。同書はいわゆる陸と海のシルクロードを經由して中國に赴いたヨーロッパ人の作成した記錄をまとめたものである。日本の中央アジア史、東南アジア史の研究は、まず同書に代表されるヨーロッパ人研究者の歴史地理學的な研究に對して、漢文史料を利用して補訂を加えるという形で出發したということができる。海域東南アジア史という觀點に卽して考えると、そうした意味での先驅的な業績が藤田豐八の『東西交涉史の研究　南海篇』（岡書院、一九三三）に收められた諸論文であり、また同じ著者による「島夷誌略校註」（『雪堂叢刻』所收、一九一五）であったということができる。

これと平行する形で、東京帝國大學史料編纂所において日本關係の歐文史料の調査研究が始まった。そして一九二八年には臺北帝國大學が設立され、その文政學部に南洋史學科が設置された。この二つの研究機關に所屬する研究者、たとえば村上直次郎、桑田六郎、岩生成一などによって歐文史料、漢文史料に基づく東南アジア史の研究が行なわれるようになった。桑田六郎「三佛齊考」（『臺北帝國大學史學科研究年報』三（一九三六）、同「三佛齊補考」（『同』五（一九三八）。ともに桑田六郎『南海東西交通史論考』（汲古書院、一九九三）所收）、村上直次郎『抄譯バタヴィア城日誌』（ただしこれは主として日本、臺灣關係の記事を譯出したものである）（日蘭交通史料研究會、一九三七。全三卷のところ、下卷は未刊のままであったが、一九七〇年から完全な形で刊行された。村上直次郎譯注中村孝志校注『バタヴィア城日誌』東洋文庫、平凡社、一九七〇―七五。全三冊）、同『六昆王山田長政』（朝日新聞社、一九四二）、岩生成一『南洋日本町の研究』（南亞細亞文化研究所、一九四〇）などがその成果である。

一九二〇年代から日本の東洋史學研究に大きな變化が生じた。それはそれまでいわゆる漢籍、つまり刊行史料に基づく研究が主であったのが、このころから未刊史料に基づいた研究が行われるようになったことである。海域東南アジア史の分野では特に『明實錄』が利用されるようになったことが大きい。山本達郎「鄭和の西征」（『東洋學報』二一―三、四（一九三四））はそうした意味での記念碑的な業績であり、また彼の「安南の貿易港雲屯」（『東方學報（東京）』九（一九三九））が重要である。このほか海域東南アジア史に關する漢文史料の研究としては、桑原隲藏『唐宋時代に於けるアラブ人の支那通商の概況殊に宋末の提擧市舶西域人蒲壽庚の事蹟』（上海東亞攻究會、一九二三。復刊桑原隲藏著宮崎市定解說『蒲壽庚の事蹟』（東洋文庫、平凡社、一九八九））、足立喜六譯註『大唐西域求法高僧傳』（岩波書店、一九四二。第四刷一九九四）などが重要な業績である。

一方ほぼ一九三〇年代からアジアの「現狀」に關する關心が高まり、滿鐵東亞經濟調査局や東亞研究所といった半官半民の研究機關が次々と設立された。また大學その他の高等教育機關でも歐米諸國の植民地支配の研究が盛んになった。これらの研究機關で

はとりあえず歐米諸國の研究書の翻譯紹介が進められ、その一環として現地の諸言語によって書かれた史料の紹介が始まった。西村朝日太郎『馬來編年史研究』（東亞研究所、一九四二）がその一例である。この時期の研究の白眉としては信夫淸三郎『ラッフルズ　イギリス近代的植民政策の形成と東洋社會』（日本評論社、一九四三。復刊『ラッフルズ傳　東南アジアの帝國建設者』（東洋文庫、平凡社、一九六八）を擧げなくてはならない。

この時期まだ歐文史料を用いた海域東南アジア史の研究は始まったばかりである。この分野では岡本良知『中世モルッカ諸島』（東洋堂、一九四四）が當時利用することのできた史料を丹念に調べた優れた研究である。

二

一九四五年に太平洋戰爭が終結するとともに、こうした研究狀況は一變した。臺北帝國大學などの研究の據點は史料編纂所を除いてすべて姿を消し、一九五七年に東京大學文學部東洋史學科に南海史講座が設置されただけであった。やがて山本達郎が中心となって南方史研究會が組織され、東南アジアだけでなく、西南中國、インドなどの研究者もここに集まり、細々ながら傳えられる海外の學術情報を紹介したり、手探りで新しい研究の方向を求めるようになった。この時期の海域東南アジア史の研究はまず手近にある漢文史料の利用から始まった。和田久德「東南アジアにおける初期華僑社會（九六〇―一二七九）」（『東洋學報』四二―一（一九五九））などがその代表的なものである。彼の業績は最終的に「東南アジア諸國家の成立」（『岩波講座世界歷史三　古代三』岩波書店、一九七〇）、「東南アジアの社會と國家の變貌」（『同十三　中世七』同、一九七一）の二つの概説的な論文にまとめられている。

やがて南方史研究會に J. C. van Leur: *Indonesian Trade and Society. Essays in Asian Social and Economic History* (The Hague & Bandung, W. van Hoeve, 1955) と B. Schrieke: *Indonesian Sociological Studies. Selected Writings of B. Schrieke* (The Hague & Bandung, W. van Hoeve, 1955) がもたらされた。戰後の日本の海域東南アジア史研究はこの二點の業績を消化することから始まったといってもよいのである。永積昭「パタニ王國の王統について　一七世紀のパタニ王國一」（『南方史研究』一（一九五九））、同「パタニ王國の支配層について　一七世紀のパタニ王國二」（『同』二（一九六〇））や、長岡新治郎「東部ジャワの海岸都市革兒背（Grissie）と饒洞（Jortan）」（『東方學』六（一九五三））など、東南アジア群島部におけるイスラム化の研究がその例である。この時期の南アジア、東南アジア史研究の雰圍氣をよく反映しているものとして筑摩書房版『世界の歷史』第十三卷『南アジア世界の展開』（一九六一。編者は明記されていないが、和田久德であった）があるが、海域東南アジア史關係の論文としては和田久德「東南アジアにおける華僑社會の成立」、生田滋「東南アジアにおける貿易港の形態とその機能――十七世紀初頭のバンタムを中心として」が收められている。

その一方で臺北から日本に引揚げた岩生成一、箭內健次、桑田六郎などは、かろうじて持ち歸ることのできた史料や、戰後ヨーロッパ諸國を訪れたわずかな機會に入手した史料を用いて海域東

南アジア史に關する研究を發表している。とくに岩生成一はオランダ語史料、漢文史料に基づいて、「下港（Bantam）の支那町について」（『東洋學報』三二―四（一九四八）など、海域東南アジアの港市に關するいくつかの研究を發表したほか、戰前の業績の改訂を進め、最終的にそれを『南洋日本町の研究』（岩波書店、一九六六）、『續南洋日本町の研究　南洋島嶼地域分散日本人移民の生活と活動』（同、一九八七）、『新版朱印船貿易史の研究』（吉川弘文館、一九八五）の三點にまとめて刊行した。また彼は演習で學生を對象としてオランダ語の教育を行ない、多くの後進を育てた。この頃増田義郎など、當時まだ數少なかったラテン・アメリカ研究者によって「大航海時代叢書」第一期全十二卷（岩波書店）が企畫された。東南アジアに關するものとしては林屋永吉譯増田義郎注「マガリャンイス最初の世界一周航海」（『コロンブス、アメリゴ、ガマ、マゼラン　航海の記錄』（一九六五）、トメ・ピレス著生田滋他譯注『東方諸國記』（一九六六）、アントニオ・モルガ著箭内健次他譯注『フィリピン群島誌』（一九六六）、ヤン・ハイヘン・ファン・リンスホーテン著岩生成一他譯注『東方案内記』（一九六八）、が收められている。

三

この時期には歐米の學界でも「海域東南アジア」という概念はまだ成立していないが、それに相當する海域の歴史に關する研究の中でとくに重要なものは、M.A.P. Meilink-Roelofsz: *Asian Trade and European Influence in the Indonesian Archipelago between 1500 and about 1630* (The Hague, Martinus Nijhoff, 1962) である。同書はいわばオランダ、イギリス東インド會社の貿易活動の研究から一歩踏み出して、それを海域東南アジアの貿易活動の一環として理解しようとした業績である。これに續いてシュリヴィジャヤに關する O.W. Wolters: *Early Indonesian Commerce. A Study of the Origins of Srivijaya* (Ithaca, Cornell University Press, 1967) が刊行された。偶然ではあるが、同じ一九六七年にアチェ王國に關する Denys Lombard: *Le Sultanat d'Atjeh au temps d'Iskandar Muda, 1607–1636* (Paris, EFEO, 1967) が出版された。この二點の業績がいわば海域東南アジア史の本格的な研究のスタートとなったということができる。

當時の日本の歴史學界ではマルクス主義的歴史學、あるいはいわゆる大塚史學の全盛時代であった。こうした狀況のもとでは海域東南アジア史の研究は二義的なものと考えられ、それ自體獨立した研究分野ではないかのように扱われていた。永積昭が港市研究からやがてオランダ東インド會社の研究へ（「オランダ人自由市民の東洋貿易　總督クーンの構想とその挫折」（『史學雜誌』六九―二（一九六〇））、そしてコーネル大學に留學して、アメリカ式の地域研究のワク内でのインドネシア民族主義の研究へとテーマを變えていった軌跡、そして地域研究の據點を目指した一九六五年の京都大學東南アジア研究センター（現京都大學東南アジア研究所）の設立が、當時の狀況をよく反映している。

四

世界的な意味で、いわゆる海上活動史 Maritime History の研究にフェルナン・ブローデルの『地中海』（Fernand Braudel: *La*

Méditerranée et le monde méditerranéen à l'époque de Philippe II. 2e édition. (Paris, Almand Colin, 1966) の刊行が大きな影響を與えたことに疑問の餘地はない。とくに一九七二年に同書の英譯が刊行されると（Fernand Braudel: *The Mediterranean and the Mediterranean World in the Age of Philip II.* Translated by Si'ân Reynolds (London, Collins, 1972-73. 2 vols. 邦譯はフェルナン・ブローデル著濱名優美譯『地中海』藤原書店、一九九一―五。全五卷）、その影響は本格的となった。南アジア史、東南アジア史の範圍でいうと、K・N・チョードリがインド洋におけるイギリス東インド會社の活動の研究（K. N. Chaudhuri: *The Trading World of Asia and the English East India Company 1660-1760.* (Cambridge University Press, 1978)）からいわゆるインド洋世界の研究（Do.: *Trade and Civilisation in the Indian Ocean. An Economic History from the Rise of Islam to 1750* (Cambridge University Press, 1985), Do.: *Asia before Europe. Economy and Civilisation of the Indian Ocean from the Rise of Islam to 1750.* (Cambridge University Press, 1990)）に轉じたことが、こうした動きを象徴している。インド洋世界を獨立した世界として認識する考え方はそれまでにもあったが、彼のこれらの業績が出版されてから以後、そうした考え方が確立したということができる。そうした意味でのインド洋世界に關する最新の研究としてはMichael Pearson: *The Indian Ocean* (London & New York, Routledge, 2003) を擧げることができる。

しかし海域東南アジア史に關しては、そうした包括的な議論の出現は遲れた。その最初の試みとしては、初期東南アジアにおける國家形成と貿易との關係を論じたKenneth R. Hall: *Maritime Trade and State Development in Early Southeast Asia* (Honolulu, University of Hawaii Press, 1985) を擧げることができる。しかしチョードリの業績に匹敵するような概説書が現れることはなく、たとえば J. Kathirithamby-Wells & John Viriers, eds.: *The Southeast Asian Port and Polity. Rise and Demise* (Singapore University Press, 1990) のように、論文集の形をとることが多かった。いうまでもなくこれは東南アジア地域の複雜な民族的、社會的、文化的構成を反映しているわけである。そうした研究の總まとめとして Anthony Reid: *Southeast Asia in the Age of Commerce 1450-1680* (New Haven & London, Yale University Press, 1988-93. 2 vols) が刊行された（邦譯アンソニー・リード著平野秀秋他譯『大航海時代の東南アジア』（叢書ウニベルシタス　法政大學出版局、一九九七―二〇〇二））。これとほぼ同時に Denys Lombard: *Le Carrefour javanais. Essais d'histoire globale* (Paris, Editions de l'Ecole des Hautes Etudes en Sciences Sociales, 1990. 3 tomes) が刊行されている。同書はいわば「ジャワ世界」をこれまでのように「内陸ジャワ」の歴史として把握するのではなく、内陸ジャワと海域東南アジアの接點として理解しようとする試みであるということができる。

海域東南アジアの歴史を統一的に理解しようという試みとしては、Lynda Norene Shaffer: *Maritime Southeast Asia to 1500* (Armonk, N. Y., M. E. Sharpe, 1996) があるが、教科書的なもので、滿足すべきものではない。そうした觀點から見ると弘末雅士『東南アジアの港市世界　地域社會の形成と世界秩序』（世界歴

史選書　岩波書店、二〇〇四）は、海域東南アジア世界を統一的に理解しようという試みとして畫期的な業績であるということができる。

この時期日本の歴史學界ではマルクス主義的歴史學がようやくその有效性を失い、大塚史學もかつての輝きを失っていった。そしてブローデルの『地中海』あるいはブローデルをも含めた『アナル』學派の影響が強くなった。また日本史では網野善彦などの主張する「海の日本史」が次第にその存在を認められるようになり、それまでの農村史中心の研究から次第に都市史の研究へと關心がひろがっていった。いうなれば日本の歴史學界においても修正主義の時代に入っていったということができる。

こうした時代の流れを反映して、海域東南アジア史の分野もようやく注目されるようになった。それはたとえば學際的な海域史、都市史などのシンポジウムや論文集に、海域東南アジアの研究者が出席や寄稿を求められることから始まっている。その意味において一九九〇年にダナンにおいて行なわれた「ホイアン國際會議」が重要である。このシンポジウムは港市ホイアンと、海域東南アジアにおける海上活動をテーマとした國際的學際的な催しで、その議事錄も刊行されている（日本ベトナム研究者會議編『海のシルクロードとベトナム』穗高書店、一九九三）。またこのころからユネスコ主催の「海のシルクロード」プロジェクトやＮＨＫの特別番組と關連して、「海のシルクロード」という、いささか誤解を招きかねない表現が用いられるようになったが、これが海域東南アジアにおける海上活動の歴史に一般の人々の關心をひきつけるのに役立ったことは事實である。海上活動全般をテーマとした論文集の類としては、たとえば秋道智彌編著『海人の世界』（同文館、一九九八）、また一般讀者對象のものではあるが、尾本惠市他編『海のアジア』（岩波書店、二〇〇〇―〇一。全六卷）がある。このほか「岩波講座世界歴史」（第二期）にも數卷にわたって東南アジア史がまとまった形でとりあげられ、海域東南アジア史に關する論文もいくつか收錄されている。そして最近になって「岩波講座東南アジア史」（岩波書店、二〇〇一―〇三。全九卷）が出版された。こうした論文集に多くの研究者が海域東南アジア史に關する論文を發表している。これらの一々を取り上げて論評すべきであるが、それは別の機會に讓り、重要だと思われる業績だけを擧げておくと、たとえばこれまでまったくといっていいほど海とのつながりが無視されていた大陸部において、ヴェトナムの歴史と海との關わり合いの重要性を指摘した桃木至朗「一〇―一五世紀の南海交易とヴェトナム　中越關係への一視角」（柴田三千雄他編『シリーズ世界史への問い三　移動と交流』岩波書店、一九九〇）、これまでアユタヤ王國の首都としてのみ認識されてきたアユタヤを港市國家として再評價することを試みた石井米雄「港市國家としてのアユタヤ　中世東南アジア交易國家論」（石井米雄他編『東南アジア世界の歴史的位相』東京大學出版會、一九九二。のち石井米雄『タイ近世史研究序説』（岩波書店、一九九九）所收）、同じパレンバンの異なる時代を扱った深見純生「シュリーヴィジャヤ帝國」（池端雪浦編『變わる東南アジア史像』（山川出版社、一九九四））、鈴木恒之「港市國家パレンバン」（同）、我が國ではほとんど關心を持たれない東南アジアの海賊についての生田滋「一九世紀前半の東南アジア群島部に

おける海賊行爲」（秋道智彌『海人の世界』同文館、一九九八）、それに「岩波講座」所收の三點の概説的な論文（弘末雅士「東南アジアにおけるイスラームの展開」（『岩波講座世界歴史六　南アジア世界・東南アジア世界の形成と展開』岩波書店、一九九九）、鈴木恒之「東南アジアの港市國家」（『同十三　東アジア・東南アジア傳統社會の形成』、一九九八）、大木昌「東南アジアの交易の時代」（『同十五　商人と市場　ネットワークのなかの國家』、一九九九）がある。なお「岩波講座東南アジア史」にもさらに多くの關連論文が掲載されているが、ここでは觸れないことにする。

五

ここで現段階における海域東南アジア史研究の現狀と問題點について二三の私見を述べたい。

まず第一に必要なことは、海域東南アジアが南アジア、東南アジア世界の中でどのような位置にあるかを明確にすることである。すでに述べたように、インド洋世界についてはそうした議論がなされているが、海域東南アジアについてはまだまだ足りないように思われる。この問題については家島彦一『海が創る文明　インド洋海域世界の歴史』（朝日新聞社、一九九三）があるが、さらに議論を進める必要があることは明らかである。この點に關連して、最近いわゆる「大航海時代」を「イベリア的グローバリゼーション」と理解し、しかもそのグローバリゼーションの様相をスペインの植民地ヌエヴァ・エスパーニャ（メキシコ）とその首都であるメキシコ・シティを中心として理解しようとする野心的な試みとして Serge Gruzinski: *Les Quatre parties du monde. Histoire d'une mondialisation* (Paris, Editions de la Martinière, 2004) が出版された。これまでスペイン領フィリピンはたとえば古典的な William Lytle Schurz: *The Manila Galleon* (E.P. Dutton, 1939), Pierre Chaunu: *Les Philippines et le Pacifique des Ibériques* (*XVI*^{e}, *XVII*^{e}, *XVIII*^{e} *siècles* (Paris, SEVPEN, 1960) などから始まって、いわゆる Spanish Lake の一部として考えられ、海域東南アジアの範疇に含められることは稀であった。しかしグリュジンスキーのいう「イベリア的グローバリゼーション」という觀點に立つと、フィリピンはもとより、東アジア、南アジア、東南アジア世界も、これまでとはがらりと違った姿を見せてくれる。今後海域東南アジア史の研究においても試みられるべき分析である。

これと關連して、中國側から見た海域東南アジアとの交渉に關しては、たとえば松浦章『清代海外貿易史の研究』（朋友書店、二〇〇二）や Roderich Ptak: *China, the Portguese, and the Nanyang.* (Aldershot, Ashgate, 2004) などの業績があるが、海域東南アジアの觀點から見た中國との關係に關する研究が少ないように思われるということを指摘しておきたい。同じことは Noboru Karashima, ed.: *Ancient and Medieval Commercial Activities in the Indian Ocean: Testimony of Inscriptions and Ceramic-sherds.* Report of the Taisho University Research Project 1997-2000 (Tokyo, Taisho University, 2002) などに見られるように、インドとの關係においても見られるし、イスラム世界については Hasan S. Khalilieh: *Islamic Maritime Law. An Introduction* (Studies in Islamic Law and Society. Leiden, Brill, 1998) という重要な業績が刊行されているのに對して、東南アジアの側

からのイスラム世界への對應についての研究も少ないように感じられる。こうした意味ではアユタヤを中心として南アジア、東南アジアの海上貿易を理解しようと試みたKennon Breazeale, ed.: *From Japan to Arabia: Ayuthaya's Maritime Relations with Asia* (Bangkok, The Foundation for the Promotion of Social Sciences and Humanities Textbooks Project, 1999) はアユタヤから東アジア、南アジアとの關係を見るという點で、示唆に富んだ業績である。

これと關連して地圖の研究であるが、ここでは一般讀者對象のものではあるが、Thomas Suárez: *Early Mapping of Southeast Asia* (Hongkong, Periplus, 1999)、日本の朱印船地圖を扱った大塚英明『羊皮紙に描かれた航海圖』(日本の美術四三八　至文堂、二〇〇二)、マニラにおける展覽會の解説ではあるが *The First Portuguese Maps and Sketches of Southeast Asia and the Philippines 1512–1571* (Lisboa, Centro Português de Estudos do Sudeste Asiatico, 2002) を擧げるだけにしておきたい。

次に貿易商品の研究であるが、これについてはまず東南アジア固有の貨幣に關するRobert S. Wicks: *Money, Markets, and Trade in Early Southeast Asia. The Development of Indigenous Monetary Systems to AD 1400.* (Ithaca, Southeast Asia Program, Cornell University Press, 1992) の重要性を指摘しておきたい。海域東南アジアで重要な商品であるインド產の織物については、一般向けのものではあるが、John Guy: *Woven Cargoes. Indian Textiles in the East.* (London, Thames and Hudson, 1998) がある。

貿易商品のなかで最も研究が進んでいるのは貿易陶磁である。貿易陶磁の研究の一つの分野は沈沒船の調査と遺品の引き揚げである。これには骨董的な興味もあって盛んに行なわれ、一般の關心を集めている。もう一つの分野は東南アジア各地における中國、イスラム陶磁器の破片、傳世品の調査である。この分野では三上次男『陶磁貿易史研究』(三上次男著作集　中央公論美術出版、一九八七―八八。全三冊)、坂井隆夫『遺品に基づく貿易古陶磁史概要　海を渡った中國陶磁』(京都書院、一九八九)、三杉隆敏『元の染付海を渡る　世界に擴がる燒物文化』(農文協、二〇〇四) などがあり、海外諸國での研究も盛んであるが、現在我が國で最も注目すべきものは坂井隆が主宰しているバンテン遺跡研究會を中心とする研究活動である。坂井は伊萬里磁器の輸出の調査から始まって、海域東南アジアにおける陶磁貿易の全體像を再構成しようと努力しており、日本側の專門家が共同で研究を實施するだけでなく、現地の研究者と協力し、若手研究者を養成するなど、國際的學際的な研究體制を作り上げている。しかも彼はほとんど獨力でこれを運營しており、その勞は察するにあまりあるものがある。その成果はたとえば坂井隆『港市國家バンテンと陶磁貿易』(同成社、二〇〇二) に見ることができる。またもう一つは日本町のあったホイアンでの考古學的發掘を行なっている菊池誠一を中心とする昭和女子大學のグループの活動である。こちらのほうも現地の研究者との協力、若手研究者の養成をも含んでいることを指摘しておきたい。その成果は櫻井清彥・菊池誠一編『近世日越交流史　日本町・陶磁器』(柏書房、二〇〇二) を通じて見ることができる。なお菊池誠一『ベトナム日本町の考古學』(高志書院、二〇〇三) も重要な業績である。同書はこれま

でいわば漢文史料の解釋の問題として進められてきた地名の比定、つまり漢文史料に見える地名に相當する地名を現在の地圖の上で探し出すという作業から遺跡との比定へと進む動きの一環であるということができる。

地域別の研究について見ると、まず第一に目につくのは、岩生成一「占城國末期の國都と貿易港について」（『東洋學報』三九―二（一九五六））は別として、チャンパに關する研究が缺けていることである。美術考古學的な研究としては、たとえば重枝豐が中心となったチャンパ王國の遺跡と文化展實行委員會編『チャンパ王國の遺跡と文化』（トヨタ財團、一九九四）があるが、歴史學的な研究はこれからの課題である。

海域東南アジアの中心地とでもいうべきマレー半島については歴史地理學の Paul Wheatley: *The Golden Khersonese. Studies in the Historical Geography of the Malay Peninsula before A.D. 1500* (Kuala Lumpur, University of Malaya Press, 1961) や、マレー半島の歴史をいわば大インド史の一環として理解しようとする H. G. Quaritch Wales: *The Malay Peninsula in Hindu Times* (London, Bernard Quaritch, 1976) があるが、最近これらの研究に代わるものとして Michel Jacq-Hergoualc'h: *The Malay Peninsula. Crossroads of the Maritime Silk Road.* Translated by Victoria Hobson (Leiden, etc., Brill, 2002. (Handbook of Oriental Studies, III-13)) が刊行されている。

最後にフィリピン、東部インドネシア海域に關する研究について見ると、この分野では James Francis Warren: *The Sulu Zone 1768–1898. The Dynamics of External Trade, Slavery, and Ethnicity in the Transformation of a Southeast Asian Maritime State* (Singapore, Singapore University Press, 1981), Do.: *Iranun and Balangingi. Globalization, Maritime Raiding and the Birth of Ethnicity* (Singapore, Singapore University Press, 2002) が先驅的かつ重要な業績である。兩書でとくに重きを置かれている海賊活動については、我が國では研究が乏しいことは殘念であるが、この地域のエスノ・ヒストリーの分野では最近早瀨晉三『海域イスラーム社會の歴史　ミンダナオ・エスノヒストリー』（岩波書店、二〇〇三）という、おそらくこのテーマに關する我が國で最初の本格的な業績が刊行されている。このほかマルク諸島に關する研究としては Leonard Y. Andaya: *The World of Maluku. Eastern Indonesia in the Early Modern Period* (Honolulu, University of Hawaii Press, 1993) がある。また小冊子ではあるが、生田滋『大航海時代のモルッカ諸島』（中公新書、中央公論社、一九九八）がある。オランダでは最近一七世紀におけるオランダ東インド會社とポルトガルとのティモール分割問題を扱った Arend de Roever: *De Jacht op Sandelhout. De VOC en de tweedeling van Timor in de zeventeinde eeuw.* (Zutphen Walburug Pers, 2002) が刊行されている。

六

最後に海域東南アジア史に關する史料あるいはその翻譯の刊行について簡單に述べておきたい。まず日本語史料に關しては石井米雄が『華夷變態』所收のジャンク貿易關係の史料を英譯した Yoneo Ishii, ed.: *The Junk Trade from Southeast Asia. Transla-*

tions from the Tosen Fusetsu-gaki 1674-1723 (Singapore, Institute of Southeast Asian Studies, 1998)がある。同書が海域東南アジア史の研究に有用な日本史料を廣く海外に紹介したという點を高く評價したい。

次に漢文史料であるが、これについては中國で史料の出版が盛んに行なわれていることを指摘しておきたい。その代表的なものとしては「中外交通史籍叢刊」がある。これは最近全一七卷一八册として新裝版が刊行され、便利になっている（中華書局、二〇〇〇）。また東南アジアの各國別に關係史料を網羅した史料集も刊行されている。私はフィリピン、カンボディア、シンガポール・マレーシア、ビルマ編しか持っていないが、本誌編集委員の御教示によると、ラオス編もある由である（中山大學東南亞歷史研究所編『中國古籍中有關菲律濱資料匯編』中華書局、一九八〇、景振國他編『中國古籍中有關老撾資料匯編』同、一九八五、陸峻嶺他編『中國古籍中有關柬埔寨資料匯編』同、一九八六、余定邦他編『中國古籍中有關新加坡馬來西亞資料匯編』同、二〇〇二、余定邦他編『中國古籍中有關緬甸資料匯編』同、二〇〇二、全三册）。またオランダではレオナード・ブリュッセなどによる最近發見された一八世紀末のバタヴィア華僑會館文書の研究と文書そのものの刊行も進められている（包樂史他『一八世紀末吧達維亞唐人社會』（厦門大學出版社、二〇〇二）、包樂史他校注『公案簿』第一册（吧城華人公館（吧國公堂）檔案叢書　同、二〇〇二）、袁冰凌他校注『公案簿』第二册　（吧城華人公館（吧國公堂）檔案叢書　同、二〇〇四））。

日本における漢文史料の翻譯、紹介についていうと、小川博編『中國人の南方見聞錄　瀛涯勝覽』（吉川弘文館、一九九八）、班固著永田英正他譯『漢書食貨・地理・溝洫志』（東洋文庫、平凡社、一九八八）、周達觀著和田久德譯註『眞臘風土記　アンコール期のカンボジア』（東洋文庫、平凡社、一九八九）、藤善眞澄譯註『諸蕃志』（關西大學東西學術研究所譯注シリーズ五　關西大學出版部、一九九一）、義淨著宮林昭彦他譯『南海寄歸內法傳七世紀インド佛教僧伽の日常生活』（法藏館、二〇〇四）などがある。

次にアラビア語ペルシャ語史料について見ると、G・R・ティベッツの二點の偉大な業績がそのほぼすべてを盡くしているということができる（G. R. Tibbetts: *Arab Navigation in the Indian Ocean before the Coming of the Portuguese* (Oriental Translation Fund, 42. London, The Royal Asiatic society, 1971): Do.: *A Study of the Arabic Texts containing Material on South-east Asia* (Oriental Translation Fund, New Series, 44. Leiden, E. J. Brill, 1979)）。なお一七世紀後半のアユタヤ王國に關するペルシャ語史料『スライマンの船』の英譯として J. O'Kane, tr.: *The Ship of Sulaiman* (Persian Heritage Series, 11. London, Routledge & Kegan Paul, 1972) がある。日本語への翻譯としては藤本勝次譯注『シナ・インド物語』（關西大學東西學術研究所譯注シリーズ一　關西大學出版部、一九七六）、藤本勝次他譯注『インドの不思議』（同二、同、一九七八）があるが、最大の業績はイブン・バットゥータ著家島彦一譯注『大旅行記』（東洋文庫、平凡社、一九九六―二〇〇二。全八册）である。

次に歐文史料であるが、まずフランス語史料としては一五二三

年のラウル・パルマンティエの航海に關する記錄二點（Charles Schefer: *Le Discours de la navigation de Jean et Raoul Parmentier de Dieppe* (Amsterdam, Philo Press, 1971): Jean-Michel Barrault: *Le Sacre et la pensée. 1529. De Dieppe à Sumatra. Les capitaines-poètes de Jean Ango ouvert la route des Indes fabuleuses* (Paris, Seghers, 1989) のほか、一六一九年から二二年にかけてアチェ、バンテンを訪れたオーギュスタン・ド・ボーリューの記錄 Augustin de Beaulieu: *Mémoires d'un voyage aux Indes Orientales 1619–1622. Un marchand à Sumatra.* Introduction, notes et bibliographie de Denys Lombard (Paris, Maisonneuve & Larose＝Ecole Française d' Extrême Orient, 1996) が刊行されている。またシモン・ド・ラ・ルベールの旅行記の校注本 Michel Jacq-Helgoualc'h: *Etude historique et critique du livre de Simon de la Loubère "Du Royaume de Siam"* (Paris, Editions Recherche sur les Civilisations, 1987) がある。オランダ東インド會社については オランダ史研究所 Instituut voor Nederlandse Geschiedenis による國史史料叢書 Rijks Geschiedkundige Publicatie に含まれたさまざまな史料集、リンスホーテン協會叢書の刊行が續けられている。このほか、小冊子ではあるが、オランダ東インド會社の活動に法的根據を與えようとするグロティウスの論文の英譯 Hugo Grotius: *The Free Sea.* Edited with an Introduction by David Armitage (Indianapolis, Liberty Fund, 2004) がある。

英語の史料としてはオックスフォード大學出版局による Oxford in Asia Historical Reprints シリーズがあるのは周知の事實であるので、ここではこれ以上觸れないことにする。これと並んでバンコクのホワイト・ロータス社によるインドシナ半島關係の英語、フランス語の記錄の復刻も多い。ポルトガル語史料の邦譯としては後述する「大航海時代叢書」に收められたものの他にメンデス・ピント著岡村多希子譯『東洋遍歷記』（東洋文庫、平凡社、一九七九。全三冊）がある。なおポルトガル本國では海域東南アジア、とくにアラカンなどビルマ沿岸におけるポルトガルの活動に關する史料の出版、たとえば Geneviève Bouchon, et al.: *Voyage dans les Deltas du Gange et de l'Irrawaddy 1521* (Paris, Centre Culturel Portugais, 1988) や、Sebastião Manrique: *Breve relação dos reinos de Pegu, Arracão, Brama, e dos Impérios Calaminã, Siammon e Grão Mogol* (Lisboa, Edições Cotovia, 1996), Manuel de Abreu Mousinho: *Breve discurso em que se conta a conquista do reino do Pegu na India oriental* (A Aventura Portuguesa, 7. Mem Martins Codex, Publicações Europa-America, 1990) があるほか、海域東南アジア史に關する研究書の出版も多いことを附記しておきたい。

最後に「大航海時代叢書」第二期、およびその續編である「一七・一八世紀大旅行記叢書」（ともに岩波書店）に收められた關係史料を一六―一七世紀のものに限って擧げてみると、前者に收められているのはジョアン・デ・バロス著池上岑夫他譯注『アジア史』（全二冊、一九八〇―八一）、澁澤元則他譯注『ハウトマン、ファン・ネック　航海の記錄』（一九八一）、生田滋譯注『フーンス、フリート、コイエット　オランダ東インド會社と東南アジア』（一九八八）、朱牟田夏雄譯注「ランカスター　東インドへの

航海」、同「ジャワ滯留記」（ともに『ジェンキンスン、ランカスター、スコット、ホーキンズ、ドレイク　イギリスの航海と植民一』（一九八三）所收）であり、後者に收められているのは二宮フサ、鈴木康司譯『ショワジ、タシャール　シャム旅行記』（一九九一）、平野敬一譯『ダンピア　最新世界周航記』（一九九二）である。

最後に現地の諸言語で書かれた史料の研究、出版について觸れなくてはならないのであるが、私自身はマレー語史料について若干知っているだけであるし、紙數の關係もあるので、それぞれの地域の研究者に紹介をお願いすべきであろう。日本語譯としてはアブドゥッラー著中原道子譯『アブドゥッラー物語　あるマレー人の自傳』（東洋文庫、平凡社、一九八〇）と野村亨譯注『パサイ王國物語　最古のマレー歴史文學』（東洋文庫、同、二〇〇一）がある。

七

以上これまでの海域東南アジア史の研究について私なりの概觀を試みてみた。實は本稿の執筆の依頼を受けたのは昨年の夏のことであったが、昨年秋ころから體調を崩し、一時入院したりしていたので、このテーマに關係ある業績を網羅的に檢討することができず、その意味において客觀性を缺くこととなってしまった。讀者に對して深くお詫びする次第である。ただ最後にいいたいのは、現在世界各國の歴史研究者の間で海上活動史の再評價が行なわれており、すぐれた業績が次々と發表されているということである。たとえばオランダでは從來オランダ東インド會社の活動にあまりにも關心が集中しすぎていたが、最近になって大西洋世界におけるオランダ西インド會社などの貿易、植民活動のほうがオランダ史にとってはるかに重要な役割を果たしていたことが認識されるようになり、それに伴ってオランダ西インド會社の研究ないしは再評價が盛んになっている。こうした動きに比べると、海域東南アジア史の研究は世界的にみてまだまだこれからだという感じである。若手の研究者がこの分野に挑戰されることを希望してやまない。